

美術館ニュース

群馬の森

no. 179
2020 1/1

西洋近代美術にみる

神話の世界

— 生き続ける古典古代 —

Metamorphosis of Classicism and Mythological Theme in the Art of 1750s–1980s

2020年2月8日[土]–3月22日[日]

会場：展示室1

休館日：月曜日（ただし2月24日は開館）、2月25日（火）

開館時間：午前9時30分～午後5時（入館は午後4時30分まで）

観覧料：一般820(650)円、大高生410(320)円

*（ ）内は20名以上の団体割引料金

* 中学生以下、障害者手帳等をお持ちの方とその介護者1名は無料

園や森に戯れる神々や半神たち、そしてその庇護を受ける人間たちが恋や冒険を繰り広げるギリシャ・ローマ神話は、時代を経るごとに解釈や創作が加えられ、美術の主題としても豊かな広がりを見せてきました。18世紀からは古代遺跡発掘の成果によって、ヨーロッパ文明の祖としての古代ギリシャ・ローマの偉大さが再認識され、歴史的・考古学的興味のもとに古典主題を表現する作品が数多く制作されました。19世紀のアカデミーやサロンでは、神話が歴史や宗教と並び最も正統な主題の一つとされ、この制度が支配的でなくなった19世紀末以降も作品のインスピレーションの源として多くの作家を魅了します。

本展覧会では、18世紀のジョヴァンニ・バッティスタ・ピラネージによる版画作品からポール・デルヴォーら20世紀の作家たちによる多彩な作品まで、近代美術に表された神話の登場人物や古代の情景をご紹介します。国内に所蔵されている絵画、版画連作、彫刻作品約60点に、イギリス、リヴァプール国立美術館所蔵の19世紀ロイヤル・アカデミーの作家たち、フレデリック・レイトンとローレンス・アルマ＝タデマの愛らしい小品2点を加え、甘美な古典の世界をお楽しみいただけます。レイトン《月桂冠を編む》は日本初公開となります。

【関連事業】

●記念講演会 2月16日(日)午後2時–3時30分
「モダニズムな神話世界—近代文明と描かれた神話」
講師：岡部昌幸(当館館長・帝京大学教授)

●講演会 3月14日(土)午後2時–3時30分
「古代のきらめきとともに新しく—ギリシャ神話の美術の歴史」
講師：藤沢桜子(群馬県立女子大学教授)
※各日とも 2F講堂、申込不要(先着200名)・参加無料

●学芸員による作品解説会
「神話と古代をテーマとした美術の基礎知識」
2月23日(日・祝)午後2時–3時 / 3月7日(土)午前11時–12時
3月11日(水)午後2時–3時 / 3月20日(金・祝)午前11時–12時
※展示会場、申込不要・要観覧料



1. フレデリック・レイトン《月桂冠を編む》1872年
リヴァプール国立美術館 ウォーカー・アート・ギャラリー
Courtesy National Museums Liverpool, Walker Art Gallery.
2. ローレンス・アルマ＝タデマ《お気に入りの詩人》1888年
リヴァプール国立美術館 レディ・リーヴァー・アート・ギャラリー
Courtesy National Museums Liverpool, Lady Lever Art Gallery.
3. マックス・クリンガー《ピュラモスとティスベ》
『オヴィディウスの「変身譚」の犠牲者の救済』より 1879年
高知県立美術館
4. ラウル・デュフィ《アンフィトリテ(海の女神)》1936年
伊丹市立美術館

オスカー・ワイルド『スフィンクス』—猫と神話と遊び心

佐藤聖子

2月8日から当館で開催される「神話の世界」展は、ヨーロッパの近代美術のなかからギリシャ・ローマ神話や古代の文化などの古典をテーマとした作品をご紹介します。出品作品は絵画、版画、彫刻作品と幅広いジャンルに渡っていますが、そのなかから、ひとつの本についてご紹介します。19世紀イギリスの小説家、詩人、劇作家オスカー・ワイルド(1854-1900)が書いた『スフィンクス』(1894年刊行、町田市立国際版画美術館蔵)です。小ぶりながらも豪華挿絵本として出版され、挿絵は画家、デザイナーであったチャールズ・リケッツ(1866-1931)が手がけています。

ご存じのとおり、スフィンクスはエジプトに起源を持つ伝説の生き物で、ギリシャ神話では上半身が女性、四肢を含む下半身が獅子の姿をした怪物です。彼女は山に住み、人間に解けない謎を問いかけて、答えられない者を喰うという害をなしていましたが、オイディプス王の神話では、謎を解いたオイディプス王に退治されます。しかしワイルドは有名なこの物語をなぞるのではなく、自身の部屋でくつろいでいる雌猫をスフィンクスの化身として表現するという粋なひねりを加えました。

敷物に寝そべり、流し目でこちらを見、柔らかい絹のような毛皮が

朽葉色の喉に顫え、とが尖った耳に小波を寄せる。

(中略)

こちらへ来い、わが美しき懶惰なるスフィンクスよ！私の膝に頭をのせて、君の喉を撫でさせてくれ。※

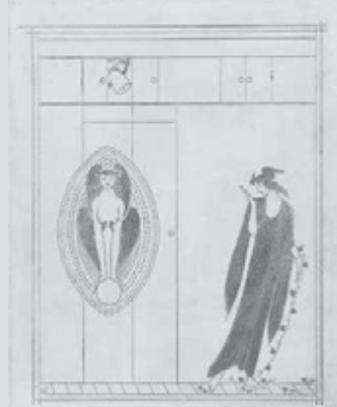
雌猫の美しさを情熱的に賛美したのちに、ワイルドはスフィンクス(=猫)に、古代のエジプトやギリシャで見てきた神話の世界の思い出を語ってくれ、と呼びかけ、耽美主義者の名に恥じない美しい言葉をもちいて、スフィンクスの冒険を夢想します。スフィンクスは、死せる美青年アドニス(アダム)の亡骸に口づけをするヴィーナスの姿をながめ、ローマ皇帝ハドリアヌスの恋人アンティノウスの笑い声を聞き、ナイル川を下ってピラミッドを遊び場とし、エジプトやメソポタミアの神々と会い、ギリシャの海神の娘ネレイスを連れ去ります。そして終盤、復讐の女神エリニユスによってワイルドの部屋に猫として運ばれてきます。このようにワイルドは得意の洒落たユーモアとともに古典的教養である神話や古代の有名なエピソードの数々に言及し、『スフィンクス』を一個の宝石のような贅沢な詩篇に仕上げています。

詩の典雅な雰囲気完成させているのはリケッツの装丁と挿絵です。表紙にはワイルドの詩に合わせて、猫のように足をそろえてちょこんと座るスフィンクスの姿が金箔押しで表されています(挿図1)。リケッツはルネサンスの木版挿絵を19世紀に甦らせることを理想としつつ、画風においては同時代のフランスの画家ギュスターヴ・モローやアール・ヌーヴォーにも影響を受けています。スフィンクスといえば、モローも1864年に《オイディプスとスフィンクス》を制作しています(挿図3)。全部で9つある挿絵のなかに、ルネサンスの木版画やアール・ヌーヴォーだけでなくウィリアム・モリスの影響を思わせる中世風の葡萄の蔓模様を描いたもの(挿図2)があることからわかるように、リケッツは出版においてモリスのケルムスコット・プレスに触発され、自ら小規模な印刷所を作って本作り全体を監修しました。

『スフィンクス』には、古典と戯れるワイルドの遊び心と猫への愛着、そして世紀末文学らしい耽美的な世界観と響き合う装飾美術の試みを見ることが出来ます。

※オスカー・ワイルド著、南條竹則訳『カンタヴィルの幽霊/スフィンクス』光文社、2015年、135-148頁

1



2



3



1. チャールズ・リケッツ《オスカー・ワイルド『スフィンクス』(表紙)》、1894年刊行、木口木版、町田市立国際版画美術館

2. チャールズ・リケッツ《オスカー・ワイルド『スフィンクス』(挿絵)》、1894年刊行、木口木版、町田市立国際版画美術館(当会場ではこの挿絵を展示します)

3. ギュスターヴ・モロー《オイディプスとスフィンクス》1864年、油彩・カンヴァス、メトロポリタン美術館、ニューヨーク
※本展出品作品ではありません

[展示室 2]

■日本と西洋の近代美術Ⅲ 1/18～3/29

当館の所蔵作品より、モネやルノワールなどの印象派から 20 世紀前半の西洋近代絵画、群馬ゆかりの作家や明治から昭和を代表する作家たちによる日本近代洋画ならびに彫刻を展示します。昨年度から他館への貸出が続いていたピカソの《魚、瓶、コンポート皿(小さなキッチン)》を久しぶりに展示いたします。あわせてご覧ください。



ピエール=オーギュスト・ルノワール《読書するふたり》



パブロ・ピカソ
《魚、瓶、コンポート皿(小さなキッチン)》

[展示室 7] 山種記念館

■志村ふくみの染織 1/18～2/24

志村ふくみは、1924(大正13)年に滋賀県近江八幡市に生まれ、31歳の時、母小野豊の指導で植物染料と紬糸による染織を始めました。野山から採取したさまざまな植物の色を自ら糸に染め、織り上げた作品は、植物のいのちの色を映した繊細かつ洗練された独自の美の世界を創造し、絨織を「工芸」から「芸術」へと昇華させました。そして、1990(平成2)年に「絨織」で重要無形文化財保持者(人間国宝)の認定を受け、2015(平成27)年には文化勲章を受章しました。当館は、1982(昭和57)年に公立美術館としては初めての「志村ふくみ展」を開催。今回は、群馬県旧水上町の藤原中学校の生徒たちとの交流から生まれた作品《雪の藤原》など、所蔵の絨織着物を中心に展示します。



志村ふくみ《鈴虫》



四方田草炎《野猿》

■四方田草炎 素描の世界 2/26～3/29

四方田草炎(1902-1981)は現在の埼玉県本庄市に生まれ、川端龍子に師事した日本画家です。龍子より自身の作品の画題「草炎」を画号として贈られましたが、次第に青龍社を離れ絵画研究会で研鑽を積みます。しかし、戦時下の東京の空襲により本画をすべて焼失。戦後は、失意の中、素描に力を注ぎ、多くのすぐれた作品を残しました。今回は、当館所蔵の草炎の素描の中から、戦後の一時期、群馬県の霧積山中の炭小屋で寝起きしながら描いた作品を中心に、身近な動植物を精緻に描写した作品をご紹介します。対象の本質へと迫る草炎の素描の魅力をどうぞ堪能ください。

2020 美術館 アート祭り

冬の美術館で、一日、 アートを楽しもう!

お話ししながら作品を見たり、いろいろな材料で作品を作ったり、美術館ならではのアート体験を、おとなも子どもも思いきり楽しんでください。参加したプログラムのスタンプを集めると、すてきなプレゼントも!

1月26日(日) 10:00～12:00
13:00～15:00

- ① COLOR LAB いろ色実験室
各コーナーで決められた色だけを使って、絵を描いてみよう!
企画・実施: 寺澤事務所・工房
- ② かさぶくろケット☆
雨の日のスーパーでよく見るアレを使って、オリジナルのロケットを作り、飛ばしてみよう!
企画・実施: 群馬県立女子大学 奥西ゼミ
- ③ くるくるまいて、しあわせのお守り◆
小枝に好きな色の毛糸をまきつけて、カラフルなお守りを作ります。
- ④ 展覧会ポスタープレゼント
お気に入りのポスターを選んで、お持ち帰りください。
- ⑤ 君は名探偵!
ヒントをたよりに、展示室のなかで作品をさがしだそう!

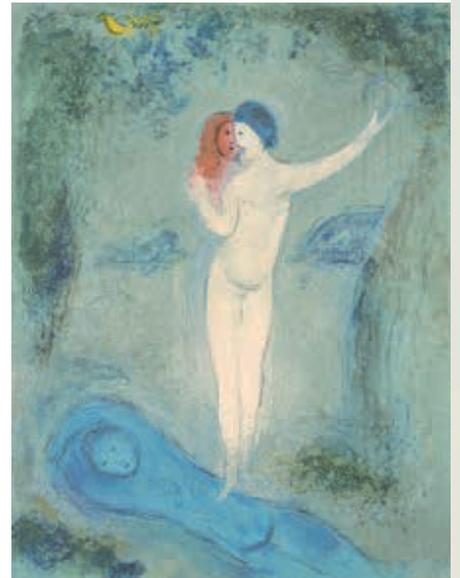
3月1日(日) 10:00～12:00
13:00～15:00

- ⑥ ふわふわかわいいタオルペット♥
色とりどりのハンドタオルで、自分だけのペットを作てあそぼう!
企画・実施: 群馬県立女子大学 奥西ゼミ
- ⑦ 香る花
紙で作った花に香りをつけて楽しみましょう!
企画・講師: 栃木美保(美術家)
- ⑧ プラ板×もようアート
作品からとった形のなかに自由にもようを描いて、身につけるアートを作ろう!
- ⑨ 紙の宝石箱
色紙を切って、折って、貼って、宝石のような形の箱を作ります。
- ⑩ アート de おしゃべり
美術館ボランティアといっしょに、おしゃべりしながら作品を鑑賞しましょう。

シャガールは第二次大戦中米国に亡命し、ようやく1948年にフランスに帰国する。この頃大規模な壁画や舞台装飾を手がけたいという願いを胸に抱いていたが、すでに60歳代になっていた彼の新たな制作の中心となったのは版画や挿絵本であった。しかしシャガールの帰国後に彼の挿絵本を次々に出版した編集者テリアドから、1952年に「ダフニスとクロエ」の挿絵制作を提案された際にはためらいがあった。2世紀末から3世紀にかけてギリシャのロンゴスが記したこの物語は16世紀のフランス語訳以来、この地で愛読されており、シャガールは1902年にヴォアールが刊行したボナールによる挿絵本に敬意を払っていたからである。

しかし1952年と54年にエーゲ海に旅行し取材したことに力を得て、伸びやかな風景を豊穡な色彩で輝かせた幸福感あふれる挿図を完成させた。この仕事は1958年にパリ・オペラ座バレエ団の「ダフニスとクロエ」に衣裳デザインを提供する仕事につながる。そしてこの見事な舞台美術を見た文化大臣アンドレ・マルローは、オペラ座の天井画の改修を彼に依頼することを思い立つ。まさにフランスを象徴する場に異邦人シャガールが選ばれたことに批判もあったが、1964年に完成した天井画はシャガールのデザインによる「ダフニスとクロエ」の上演とともに披露され、喝采を浴びる。そこにはパリにゆかりの作曲家たちと様々なオペラの場面がちりばめられ、モーツァルトの「魔笛」、ストラヴィンスキーの「火の鳥」、ベルリオーズの「ロミオとジュリエット」などとともに、ラヴェルによる「ダフニスとクロエ」の場面より、婚礼の夜の場面が描かれている。

「ダフニスとクロエ」の挿絵の仕事は、米国からフランスに戻り、ここを故郷に定めたシャガールを、オペラ座の天井画という、国家的な場での活躍へと導いたのである。



マルク・シャガール
『ダフニスとクロエ』より〈クロエの接吻〉
リトグラフ・紙 1961年刊行

Catch the eyes 目から心へ (仮称)

2020年4月18日[土] - 6月7日[日]

会場: 展示室1

休館日: 月曜日(ただし、5月4日は開館)、5月7日(木)

観覧料: 一般 620(490)円、大高生 310(240)円

* () 内は 20 名以上の団体割引料金

* 中学生以下、障害者手帳等をお持ちの方とその介護者 1 名は無料

美術作品と出合う時、ほとんどの人はまずそれを目で捉え、それから、何が描かれているのか、どのように作られているか、などの考えに移っていきます。人の目を惹きつけ、はっとさせる力は、それが全てではないにしても、美術作品にとってプラスに働くことは間違いありません。

作品が人の目を引く理由は様々です。色が鮮やか、ものすごく大きい、とても小さい、といった造形的な面もあれば、特定の感覚や感情を起させる心理的要因もあるでしょう。この展覧会では、当館のコレクションを中心に、そんな「人の目を引く」作品を、いくつかの切り口から紹介します。



アンリ・マティス『ジャズ』より〈運命〉1947年

